牛若と弁慶

楠山正雄

青空文庫

むかし源氏と平家が戦争をして、お互いに勝つたり負けたり
 していた時のことでした。源氏の大將義朝には、悪源太
 義平や頼朝のほかに今若、乙若、牛若、という三人の
 子供がありました。ちようどいちばん小さい牛若が生まれたば
 かりのとき、源氏の旗色が悪くなりました。義朝は負けて、
 方々逃げかかっているうちに、家来の長田忠致というもの
 に殺されました。

平家の大將清盛は、源氏にかたきを取られることをこわ

がつて、義朝よしともの子供こどもを見つみつけしこだい殺ころそうとかかりました。

義朝よしともの奥方おくがたの常盤御前ときわごぜんは、三人にんの子供こどもを連つれて、大和やまとの国くにの片田舎かたいなかにかくれていました。

清盛きよもりはいくら常盤ときわを探さがしても見みつからないものですから困こまつ

て、常盤ときわのおかあさんの関屋せきやというおばあさんをつかまえて、

「常盤ときわのいるところをいえ。いわないと殺ころしてしまうぞ。」

と毎日まいにちひどくせめました。

常盤ときわはこのことを聞きいて、

「おかあさまを殺ころしてはすまない。わたしが名なのつて出でても、子こ供どもたちはまだ小ちいさいから、たのんだら殺ころさずにおおいてもらえるか
もしれない。」

と思つて、京都へ出かけました。

ちようど冬のこと、雪がたいそう降っていました。常磐は牛しわかふところ、若を懐に入れて、乙若の手をひいて、雪の中を歩いて行きました。今若はそのあとからついて行きました。

さんざん難儀をして、清盛のいる京都の六波羅のやしきに着くと、常磐は、

「おたずねになつてゐる常磐でございます。三人の子供をつれて出ました。わたくしは殺されてもようございますから、母の命をお助け下さいまし。子供たちもこの通り小さなものばかりでございますから、命だけはどうぞお助け下さいまし。」

と申しました。

親子おやこのいたいたしい様子ようすを見ると、さすがの清盛きよもりも氣きの毒どくに思おもつて、その願ねがいを聞ききとどけてやりました。

それで今いま若わかと乙おと若わかとは命いのちだけは助たすかつて、お寺てらへやられました。牛若うしわかはまだお乳ちちを飲のんでいるので、おかあさんのそばにゆるいることを許ゆるされましたが、これも七つになると鞍馬山くらまやまのお寺てらへやられました。

そのうち牛若うしわかはだんだん物ものがわかつて来きました。おとうさんが平家へいけのために滅ほろぼされたことを人ひとから聞きいて、くやしがつて泣なきました。

「毎まい日にちお経きやうなんかよんで、坊ぼうさんになつてもしかたがない。おれは劍術けんじゆつをけいこして、えらい大將たいしようになるのだ。そして

平家を滅ぼして、おとうさまのかたきを討つのだ。」

こう牛若は思つて、急に剣術が習いたくなりました。

鞍馬山のおくに僧正ガ谷という谷があります。松や杉が

茂つていて、昼も日の光がささないような所でした。牛若は一

人で剣術をやつてみようと思つて、毎晩人が寝しずまつて

から、お寺をぬけ出して僧正ガ谷へ行きました。そしてそこ

にたくさん並んでいる杉の木を平家の一門に見立てて、その中

で一ばん大きな木に清盛という名をつけて、小さな木太刀でぼ

んぽん打ちました。

するとある晩のことでした。牛若がいつものように僧正

ガ谷へ出かけて剣術のおけいこをしていますと、どこからか

鼻はなのばかに高いたか、見上げるような大男おおおとこが、手に羽うちわをもつて、ぬつと出て来きました。そしてだまって牛若うしわかのすることを
見みていました。牛若うしわかは不思議ふしぎに思おもつて、

「お前まえはだれだ。」

「いいいますと、その男おとこは笑わらつて、

「おれはこの僧そうじよう正ただガ谷たにに住すむてんぐだ。お前まえの劍術けんじゆつはま
ずくつて見みていられない。今夜こんやからおれが教おしえてやろう。」

「いいました。」

「それはありがとう。じゃあ、おしえて下ください。」

と、牛若うしわかは木太刀きだちを振ふるつて打うつてかかりました。てんぐは
かるく羽はうちわであしらいました。

この時からときてんぐは毎まい晩ばん牛うし若わかに劍けん術じゆつをおしえてくれま
した。牛うし若わかはずんずん劍けん術じゆつがうまくなりました。

するうち、牛うし若わかが毎まい晩ばんおそく僧そう正じやうガ谷たにへ行いつて、あや
しい者ものから劍けん術じゆつをおそわつていふことことを和おし尚しようさんさんに
告つげ口ぐちしたものがありました。和おし尚しようさんさんはびつくりして、さつ
そく牛うし若わかをよんで、髪かみを剃そつて坊ぼうさんさんにしようしようとしました。牛うし
若わかは、

「いやです。」

といいいながら、いきなり小こ太だ刀ちに手てをかけて、こわい顔かおをして
和おし尚しようさんさんをにらめました。

その勢いきいにおそれて、髪かみを剃そることは止やめました。

牛若うしわかはこうしているとまた、

「坊ぼうさんになれ。」

といわれるにちがいないと思おもつて、ある日ひそつと鞍馬山くらまやまを下おりて京きょうと都へ出ました。

牛若うしわかはもう十四、五になつていました。

二

そのころ京きょうと都との北きたの比叡山ひえいざんに、弁慶べんけいという強つよい坊ぼうさんがありました。この弁慶べんけいは生うまれる前まえおかあさんのおなかに十八箇月かげつもいたので、生うまれるともう三つぐらいの子供こどもの大きさがあ

つて、髪かみの毛けがもじやもじや生はえて、大きな歯はがによきんと出て
いました。そしてずんずん口をききました。

「ああ、明あかるい。」

はじめておかあさんのおなかからとび出だしたとき、こういつて
いきなりちよこちよこと歩あるき出だしたそうです。おとうさんは気味きみ
をわるがつて、大きくなるとすぐ、お寺てらへやつてしまいました。

お寺てらへやられても、生うまれつきたいそう気きのあらい上に、この上
なく力ちからが強いので、すこし気きにくわれないことがあると、ほかの坊ぼう
さんをぶちました。ぶたれて死しんだ坊ぼうさんもありました。みんな
は弁慶べんけいというと、ふるえ上あがってこわがっていました。

そのうちに比叡山ひえいざんの西塔さいとうの武蔵坊むさしぼうというお寺てらの坊ぼうさんが

亡なくなりますと、弁慶べんけいは勝手かってにそこに入りこんで、西塔さいとうの武む蔵坊さしぼう弁慶べんけいと名のりしました。

ある時とき弁慶べんけいはおもいました。

「宝たからはなんでも千という数かずをそろえて持つものだから。奥おうしゆ

州うの秀衡ひでひらはいい馬うまを千疋びきと、鎧よろいを千りようそろえて持つてい

る。九州きゆうしゆうの松浦まつうらの太夫たゆうは弓ゆみを千ちようとうつぼを千本せんぼんそろ

えてもっている。おれも刀かたなを千本せんぼんそろえよう。都みやこへ出て集あつめたら、

千本せんぼんくらいわけなくできる。」

こう考えて、弁慶べんけいは黒糸くろいとおどしの鎧よろいの上に墨すみぞめの衣ころもを着き

て、白しろい頭巾ずきんをかぶり、なぎなたを杖つえについて、毎まい晩ばん五ご条じょうの

橋はしのたもとに立たっていました。そしてよさそうな刀かたなをさした人が

来ると、だしぬけにとび出して行って奪いとります。逃げようとしたり、すなおに渡さなかつたりするものは、なぎなたでなぎ倒しました。

すると、このごろは毎晩五条の橋に大坊主が出て、人の刀をとるといふ評判がぱつと高くなりました。

坊主ではない、てんぐだというものもありました。そしてみんなこわがって、日が暮れると五条の橋をとる者がなくなりました。

ある時弁慶がとつて来た刀を出して数えてみますと、ちょうど九百九十九本ありました。弁慶はよろこんで、

「うまい、うまい、もう一本で千本だぞ。おしまいに一ばんいい

刀かたなを取とつてやりやりたいものものだ。」

と独ひとり言ごとをいいました。そしてその晩ばんはわわざわざ五ご条じょうの天てん

神かみさまにおおまいりりををして、

「もう一本ほんで千本せんになりなります。どうぞ一いばんいい刀かたなを授さずけ下ください。」

といいつて、それそれからからいいつつももののよよううに、五ご条じょうの橋はしの下したへ行いつつて立たつていいまました。

三

牛若うしわかは五ご条じょうの橋はしの大おおどろろぼううのううわわささを聞きくと、

「ふん、それはおもしろい。てんぐでも鬼でも、そいつを負かして家来けらいにしてやろう。」

と思おもいました。

月のいい夏の晩なつ ばんでした。牛若うしわかは腹巻はらまきをして、その上に白しろひたれ直垂ひたれ ちきを着きました。そして黄金こがねづくりの刀かたなをはいて、笛ふえを吹ふきなから、五ご条じょうの橋はしの方ほうへ歩あるいて行いきました。

橋はしの下したに立たっていた弁慶べんけいは、遠とおくの方ほうから笛ふえの音ねが聞きこえて来くると、

「来きたな。」

と思おもって、待まっていました。そのうち笛ふえの音ねはだんだん近ちかくなつて、色いろの白しろい、きれいな稚児ちごが歩あるいて来きました。弁慶べんけいは、

「なんだ、子供か。」

とがっかりしましたが、そのはいている太刀に気がつくど、

「おや、これは、」

とおも
と思いました。

弁慶は橋のまん中に飛び出して行って、牛若の行く道に立ち
ちはだかりました。牛若は笛を吹きやめて、

「じやまだ。どかないか。」

といいました。弁慶は笑って、

「その太刀をわたせ。どいてやろう。」

といいました。牛若は心の中で、

「こいつが太刀どろぼうだな。よしよし、ひとつからかってやれ

「
とおも
と思いました。」

「ほしけりや、やってもいいが、ただではやられないよ。」
うしわか
牛若はこういつて、きつと弁慶べんけいの顔かおを見つめました。
べんけい
弁慶はいら立つて、

「どうしたらよこす。」

とこわい顔かおをしました。

ちから
「力ちからづくでとつてみる。」

うしわか
と牛若うしわかがいました。 弁慶べんけいはまつ赤かになつて、

「なんだと。」

といいながら、いきなりなぎなたで横よこなぐりに切りつけました。

すると牛若うしわかはとうに二三間げんあと後に飛びのいていました。弁慶べんけいは少しすこおどろいて、また切きつてかかりました。牛若うしわかはひよいと橋はしの欄らんかん干かんにとび上があがつて、腰こしにさした扇おうぎをとつて、弁慶べんけいの眉間みけんをめぐけて打ちうつけました。ふいを打うたれて弁慶べんけいは面めんくらつたはずみに、なぎなたを欄らんかん干かんに突つき立てました。牛若うしわかはその間まにすばやく弁慶べんけいの後ろうしに下おりてしまいました。そして弁慶べんけいがなぎなたを抜ぬこうとあせつていゝ間に、後ろうしからどんとひどくつきとばしました。弁慶べんけいはそのままとんと五六間けん飛とんで行いつて、前まえへのめりました。牛若うしわかはすぐとその上うまのに馬乗のりに乗のつて、「どうだ、まいったか。」

といいました。

弁慶べんけいはくやしがつて、はね起おきようとしましたが、重おもい石いしで押おさえられたようにちつとも動うごかれないので、うんうんうなつていました。牛若うしわかは背中せなかの上で、

「どうだ、降参こうさんしておれの家来けらいになるか。」

といいました。弁慶べんけいは閉口へいこうして、

「はい、降参こうさんします。御家来ごけらいになります。」

と答こたえました。

「よしよし。」

と牛若うしわかはいつて、弁慶べんけいをおこしてやりました。弁慶べんけいは両

手よを地ちについで、

「わたくしはこれまでずいぶん強つよいつもりでいましたが、あなた

にはかないません。あなたはいつたいどなたです。」

「いいました。牛若はいばつて、

「おれは牛若だ。」

「いいました。」

弁慶はおどろいて、

「じゃあ、源氏の若君ですね。」

「いいました。」

「うん、佐馬頭義朝の末子だ。お前はだれだ。」

「どうりでただの人ではないと思ひました。わたしは武蔵坊弁

慶けいというものです。あなたのようなりっぱな御主人ごしゆじんを持てば、

わたしも本望ほんもうです。」

といいました。

これで牛若うしわかと弁慶べんけいは、主従しゅじゆうのかたい約束やくそくをいたしました。

四

牛若うしわかは間まもなく元服げんぷくして、九郎義経くろうよしつねと名なのりしました。そしてにいさんの頼朝よりともをたすけて、平家へいけをほろぼしました。

弁慶べんけいは義経よしつねといつしよに度々たびたび戦いくさに出て手柄てがらをあらわしました。後のちに義経よしつねが頼朝よりともと仲なかが悪わるくなつて、奥州おうしゆうへ下くだつた時ときも、しじゆう義経よしつねのお供ともをして忠義ちゆうぎをつくしました。そし

ておしまいおうしゆうに奥州おうしゆうの衣川ころもがわというところで、義経よしつねのため
に討うち死じにをしました。その時とからだ体たじゆうに矢やを受うけながら、じつ
と立たつて敵てきをにらみつけたまま死しんでいたので、弁慶べんけいの立たち往お
生うじようだといって、みんなおどろきました。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

※「僧正ガ谷」の「ガ」は底本では小書きになっています。

入力：鈴木厚司

校正：今井忠夫

2004年1月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

牛若と弁慶

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>